

路上の鈴

遠矢徹彦

徒労に終わったいくどめかのハローワーク通いの帰途、なんとかせねばと思いつながら、これといった方策があるわけもなかった矢野の心に、不意打ちのような強い帰郷への想いが湧き、路上に立ち尽くした。あの土地に戻って、しばらく身も心も投げだしたい、ただそれだけの願望がひどく切実な唯一のことに思えだしたのだ。ハローワークの建物を背に坂道を下りながら、彼は厄介な立木を切り倒したあのような空虚な心持ちになっていた。

列車内で飲みすぎた缶ビールのせい、膨張した重い血液が踵のあたりにけだるく澱んでいる。その足をひきずりながら金沢市内の目抜き通りをぬけ、ホテルに向かって歩いた。片町の裏通りに面したあまりめだたないプチホテル

を、この街でしばらく逗留する必要がある場合にときおり利用していた。

ホテルにたどりついたその瞬間、なにかしら臍腑が凍てついていくような深い疲労感に引きずりこまれて、そのままベッドにもぐりこんでしまった。夜半に目が覚めてトイレに立ったあとも、寝つけないままに備え付けの冷蔵庫を開けて缶ビールを飲んだが、ふと路上で拾った金の鈴のことが気になりだして、床に脱ぎ捨てたままになっているズボンのポケットからそとと抜き出して眺めた。ホテルの近くまでやって来て、庇を密集させた飲食店街からこのホテルの位置に不意に折れ曲がる裏道に差しかかったとき、靴先にあたってかほそく澄んだ音色を立てて転がっていくも

のがあった。そのまま行き過ぎようと思ったのだが、その音色の染み入るような響きに惹かれてほとんど反射的に片手を差し伸べていた。誰かが落としていったものらしい、金色の鈴のついたどこにもあるキーホルダーであった。どうしてこんなものを拾ってしまったのだろう。ひよんなことから自分のなかに入りこんでしまったこのものの存在が、疎ましいようなしかししまさら棄てるには惜しい断ち切れない郷愁にも似た未練、そんな物思いが矢野をゆっくり揺らしはじめている。ひとたびめざめてしまったその感情の轍が、しだいに消しがたく深い条痕を心の皮膜に刻んでいくようなのをひっそりと感じていた。彼はベッドの上であぐらをかいたまま壁にもたれかかった。今はいつたい何時なのだろうか。壁時計の液晶文字はひどく読み取りにくかったが、どうやらもう午前二時を過ぎているようだ。香林坊の裏通り界隈の飲み屋街も、ときおり遠くで深夜の客を送り出す女たちの、嬌声のさざめきがほんの微かに聞こえているだけになっていた。寄りかかっている壁の反対側の壁、ちょうど真向かいにあたる位置に四角い大鏡があり、スタンドの明かりだけのせいなのか、いやに陰影の濃い鋭く肉のそげた青白い矢野の顔が映っていた。腹部のあたりで缶ビールを左手に握りしめ、れいの鈴付きのキーホルダーを右手でつまみ上げている。どこかの見知らぬ初老の男

のようだ。

ふと、室内に立ちこめだしている夜気の濃みが息苦しく感じられてきて、いっきにそれを掻きまわしてみたくなくなった。少し力をこめ思いきって鈴を振ってみた。静謐な水面を打つ水滴のような音色であった……。

*

意識がまだ戻らないでいるその女の顔を、矢野はタオルを絞ったりする合間にもすばやく盗み見ていた。それまで気づかなかつたが、血糊をぬぐいとられた耳朶には、朱色の七宝のピアスが光っている。そのことがいつそう彼の視線を注意深いものにさせていた。妙に大人っぽい眉のあたりの意志的な暗さとはうらはらに、透けて見えるのは目もとやあごの輪郭に残る幼顔なのであった。そしてその顔立ちには、すでにどこかで出会ってしまったような気がしてならない。からまりあう地下茎の絨毛にも似た模糊とした記憶なのだが……そのときであった、あまりにも幽かではほとんど耳鳴りか幻聴の類いともとれる澄んだ鈴の音を、たしかに聴いたように思った。ひよっとすると、彼女のポケットにでもしまわれていた鈴付きの御守りか何かがあるいは鳴ったのかもしれない。その音色は、耳に染みついてなおしばらく残りつづけた……。

お茶の水駅を出て、通いはじめたばかりの美術研究所に向かつて歩いていると、駅構内にも微かに立ちこめていた催涙ガスの悪臭が、風の向きぐあいでもわかに強まり、群衆の喚声とガス銃の発射音が聞こえた。慌しげに行き交うものの中には、隊列から離れてピラを配っているヘルメット姿の学生たちもちらほら見受けられる。受け取ったピラにはベトナム反戦、成田空港阻止という見慣れた活字が並んでいた。大通りに出たとたんに、道路を遮断した赤黒の旗とヘルメットに埋もれるぎっしり一塊になったデモ隊列、それらと一定の距離をとってガス銃と楯をかまえた機動隊という、すっかり馴染んでしまったいつもの光景が目に入った。その日はしかし火炎瓶なども飛び交っていたりして、かなり党派系の学生や群衆の動きも活発で、彼らの興奮の度合いがその喚声の高さに表れていた。が、矢野は物見高いやじ馬の間をすりぬけると、いくらか冷えた心持ちを抱いてペープメントを研究所のほうに向かつて歩いた。まだ開講までには時間があつたので、大通り沿いの行きつけの喫茶店に入った。こうした騒乱の眺めはすでにこの界隈の日常風景でもあつたから、たいていの商店や喫茶店は営業中の看板をだしていた。

店内は昼飯時のせいもあつてか、取材用のカメラを卓上に置いた新聞記者らしいのや、すぐ先ほどまで群衆にまぎれて石畳の欠片を投げついていたのかもしれない、ノンセクトく荒れているな、学生さんたち。この界隈を解放区にしようつてんだからな、ちよつと無茶だよねえ」と誰にともなくぼやき口調で言った。

「鍵をかけちゃいましょうよ、それにシャッターも」顔色の悪い学生風の男が顔見知りらしいマスターにそう言うので、マスターも慣れた態度で領き、作業員たちと矢野のほうに諒解を求める視線を投げた。

作業員のほうも矢野も、むろん外に出るつもりなどなかったので黙って領り返し、そのまま食事をつづけていた。ふと気づくと、それまで新聞を読んでいた作業員のひとり、ゆつくりと窓辺にやってきて窓ガラスに両手をあてが、街路で始まりだしたいっせいの検挙の光景を食い入るように眺めている。まだ若い、たぶん学生たちと同じ年頃の男なのであるのか、陽に荒れたやや偏平な顔立ちに濃い意志的な眉が印象的であった。

「あ、ひでえな、またやられてるわ、可哀想に」と男は独り言めいて眩し微かに眉をひそめていたが、すぐに無表情に近い状態に戻るといつまでもじつと街路の光景に見入っていた。

が、そのとき矢野は、男の農民の面影を刻んだ横顔と角張った肩の輪郭に、ふと言いやうもない飢えに近い寂しさが滲みだしているのを感じた。それは大都市の仄暗い隧道を微かな光を求めて、たった一人で歩かねばならない者の、

の孤独そうな学生風の男、そして騒ぎのただ中であっても、仕事を続行しなければならぬ道路工事の若い作業員たちもいた。トーストと紅茶を注文すると街頭が一望できる窓ぎわのテーブルに席をとり、美術研究所発行の薄っぺらなテキストに目を通したりしていた。

独学で習得した木工芸の技能が思わぬところで役立ち、矢野は都下多摩地区の障害者施設で働きだしていた。けれども、彫刻家を志しながら窮迫した家計の事情で、美大入学を断念した暗い思いだけははずつと心に残っていた。その研究所に通学しはじめたのも、そうした心のひもじさをいくらかでも満たそうとしてのことだった。そこは主として美大受験生や日曜画家たちの溜まり場なので、講座内容も美術教養的なものでしかなかった。

にわかに窓ガラスごしの街路が騒がしくなりだし、歩道を小走りに行き交う人々の動きが激しくなった。ガス銃の発射音がひっきりなしに間近で響き、デモ隊列が散り乱れて大通りを駆けぬけていく姿が見える。

「おお、始まつたらしいな、いっせいの検挙が」そのときを待ちかねていたように、記者らしい男がなんだかひどく嬉しそうに呟いて、カメラを手に立ち上がり勘定もそこそこ外へ飛び出していった。

「因果な商売だね、記者つてのも」男を見送りながら、マスターは蔑むような笑いを浮かべ、「しかし今日は、ひどく自分にも覚えのあるあの心持ちなのに違いなかった。いつしかその男の眼差しに重ねながら、矢野は街角の叛乱の終焉を見つめていた。

喫茶店前の路上に落下したいくつかのガス弾から、まっ黄色い催涙ガスが噴きだし、それが扉の隙間から侵入しはじめた。マスターはシャッターを半分ばかり下ろし、濡らした古新聞を隙間に詰めこむ必急の目張り作業をやりだしたが、すぐに手を休めると傍で手伝っている矢野たちを見返り、扉のガラス板の向こう側を無精髭のめだつ顎先でしゃくつてみせた。

「おい、あれを見ろよ」

見ると、路上をこちら側に向かつて、少女めいた身体つきの若い女が、酔っ払いのようにならついて歩いてきた。首に引っかけられた顎紐にだらしなく吊るされた格好で、黒ヘルメットが彼女の背中でのたがいに揺れる。前のめりになって手を伸ばした彼女は、扉にたどり着くとガラス板に両手をあて、しゃがむような格好で身体を支えながら内部の様子を窺いだした。たぶん追われているのである、額の傷から流れだす血液のすじがいくつにも分かれ、頬から顎へ伝って滴っている。それが陽を受けてぎらつき、オカッパ刈りの頭髪が粗彫りの阿修羅像のように逆立ち、血糊でこわつき膨らんでいた。疲労と興奮のために澱みくすんだ顔面の血色が、内臓を病んでいるもののように青黄色

く、鋭く張りつめていた。その埴輪人形に似た単純でつぶらな目と、何かを叫んでいる小さなまるい口の形だけが、いやに元氣そうに見えるのだった。不運にも網にかかって陸へ引き上げられ、地べたで空しく跳びはねている小魚の顔だな、とそんな印象が彼の脳の裏に柔らかく触れてきた。彼女は二、三度扉のガラスを激しく叩いてから、ぐにやりと膝を折るとその場所へ倒れこんだ。コンクリートの上を転がるヘルメットの音がうつろに響いた。マスターは扉の内錠を開けようとして少し慌てていたのか手取っていた。さいわい追手は来ないようであった。テーブルと椅子を片側へ寄せると、その女をどうにか横たえるだけのスペースが床板の上でできた。彼女は緊張の緩みと額に受けた打撲の衝撃とで軽い失神状態に落ち入っているらしく、少し傾いた蒼白な横顔を見せたまま昏睡している。耳朶から首筋にかけてこびりついた血糊がまだ鮮やかなまま。マスターが奥の部屋から毛布を抱えて出てきたのをきっかけにして、矢野たちは水を汲みに走ったり、タオルを冷やしたり、扉口で見張りに立ったりしはじめた。

「マスター、血止め薬みたいなものないのかね」と若い作業員は手ぎわよく彼女の胸もとを緩め呼吸を楽にさせながら言った。

出血はいくらか止まりかけていたとはいえまだつづいていた。彼は絞ったタオルで彼女の額の埃や凝固しはじめた

らか困惑した面持ちでそれを受け取りながら言った。

「あたし、節子っていうんです。大学はM美、故郷が金沢なの……それだけで勘弁してほしいんですけど」

「いや、いいんですよ、当然のことですから。でも、驚いたな、しかし」

「なにがでしょうか？」

自分の郷里も金沢であることを言うと、あら偶然ね、と呟いただけで、それだけのことでそんなに驚くこともなからうに、といったふうであった。

「せつちゃん、という幼友達がいましたね。その子の名が節子なんですよ。……亡くなりましたけどね、幼い頃に」

「好きな子だったんですか」

「あの年ごろじゃ芽生えないんじゃないかな、そういう感情って」

喫茶店で耳にした幽かな鈴の音のことを、彼は思い浮かべていた。

「そんなことないわよ、現に生きてるじゃないのよ、あなたの中でせつちゃんが……嘘ついても駄目です」そう言う彼女が、ようやくすべての事情が呑みこめたともいうふうになり合点に領き、それまでいくらか硬さの残っていた表情をふっと崩して、柔らかな笑みを浮かべた。

「ところで、妙なことを聞くようですが。きみ、鈴付きのお守りかなんか持ってない、ポケットに」

血液を拭き取っている。タオルは矢野が洗い、学生のほうはバケツの水を取り替えるためにまた奥へ走り出した。後で聞いたのだが、その作業員は故郷の村の消防団員だったことがあり、救急処置を一通り心得ていたのだ。彼のてきぱきした処置ぶりに、矢野は感嘆の思いで見とれていた。

「これで消毒すると、よくきくん」飲み残しの度の強そうな焼酎入りの大瓶を差し出してマスターが言った。焼酎の瓶と家庭用救急薬箱をマスターから受け取ると、村の元消防団員は立て膝のまま彼女の首の下に手を差し入れた。

彼女の風体がめだつとまざいということ、乗車駅を變更し、神田駅まで作業員たちの業務用の軽トラックに乗せてもらった。彼女の下車駅が国分寺だったので、同方向の矢野が彼女を送っていくことになったのだが、衣服の損傷があまりにひどかったので、間に合わせのジャケットとジーンズを通りすがりの洋品店で購入した。駅のトイレで衣服を取り替えて出てきた彼女は、なんだか別人のように快活そうに振る舞いだした。顔の大きな絆創膏にときおり人々の視線が走ったが、彼女は平気で人ごみをすり抜けていった。ホームのベンチで電車を待つ間、やっとお互いの内部に遠慮がちな視線を投げるような心持ちになっていた。

手持ちぶさただだったので名刺を差し出すと、彼女はいく

「そんなもの、持つてるわけないでしょ。なぜ？」彼女は、沈黙してしまった彼の内部を覗きこむような目つきをして、「へえ、矢野さんて面白い方なのね」と手にした名刺と彼の顔を見くらべながら、その四角い紙片をひらひらさせて言うのであった。

国分寺駅で下車する間ぎわに、それまで無言だった彼女が顔を矢野の耳もとに近づけて囁いた。

「あたし、せつちゃんの身代わりになってあげます。きつと訪ねていきますから、近いうちに」

しばらくして彼女のほうから電話があり幾度か会ううちに、両親とは絶縁状態で送りも途絶えがちなこと、したがって家賃も滞っていて明日にでも出なければならぬ窮状にあることなどを知らされた。彼はごく気軽な口調で、部屋を整理さえすれば、きみが使えそうな一室ぐらいなんとかなりそうだよ、などと行ってしまっただけから、すぐにへんな間の悪さを覚えてたじろいでいた。

「つまり、間借り人ということね」と彼女は、ひどく晴ればれとした声で言った。

「間借り人か……ちょっと無味乾燥に響くなあ。同居人ってどこかな」

彼は気持ち少し上滑りしている状態を意識していた。「同居人。いいわねえ、もうそれに決めたわ。……同棲っ言葉が流行ってるけど、あたしあれ大嫌い。べたっとし

た感じがして」

すっかり上機嫌になった彼女は、その国分寺駅前の居酒屋でカウンターに頬杖をつき、何杯目かのビールの大ジョッキを飲み干しながら喋っていた。外見のひ弱そうな体型からは予想外な、その飲みっぷりに驚かされたが、彼のほうも先ほどのへんな間の悪さとたじろぎをいつしか忘れてしまっていた。彼女の家財道具が運びこまれたのはそれから間もなくであったが、一室だけではとても納まりきれなかった……。

*

ホテルを出た後も、ベッドで感じた昨夕の疲労の深さからまだ抜け切れていなかった。しばらく歩いて行くと、大通りを外れた裏道沿いに午前薄陽を映して用水路が流れている。その流水はところどころで渦を巻き、急傾斜の優美な曲線コースを蛇籠の網目にも似た鋭い流紋をつくって走りぬけていく。強い流速が巻き起こす風を受けて、水際の石垣に繁茂する蘚苔類に混ざった茎の長い白い花々が、小止みなく一定のリズムをとってふるえていた。それらの草花は勢いのよい流れから偶然の微妙な力学によってそこへたどり着いたものらしい。

香林坊通りの道筋がゆるやかにカーブを描き、犀川大橋にいたっている河岸沿いの街並みが見えた。旧犀川大橋の、

背後で森田の声がした。作品を一通り見終えたららしい森田は、画廊の片隅に据えられたソファで一休みしていたが、やがて立ち上がると矢野の脇から覗きこんだ。

『失われた時を彷徨する女の自画像』と題されたその人物画の描き手は、アマチュア画家で森田の知りあいの三島澄子という女性だった。病んでいるような肌色をしたもうあまり若くは見えない女が、鮮血に近い朱色のイヤリングをつけて手に花束と麦藁帽子を持ち、ひっそりとうつむきかげんに立っていた。一瞬、矢野は息をつめて身動きできなくなっていた。その女の輪郭から醸しだされる雰囲気、別れて久しいあの節子にあまりにも似ていたからなのだった。が、気を落ち着けてあらためて視線を定め直している間に、すでにその印象はかき消えていた。全体のバランスを無視した奇妙な明るさをたたえている青、過剰な塩分を孕む死海の藍、腐っていく沼の緑青、それらが液状に混じり合う空間へなれば溶けくずれていきそうな女の像は、深い眠りの底に置き忘れてきた一葉の写真、へんになまなましくくせについに輪郭をもつことのない夢魔といったものとの類縁性を感じさせた。美術的な価値とはまたべつのところ、その作品に知らぬまに魅せられてしまっている自分に気づいて、彼はわれに返った。森田は、矢野の視線が絵の方に引っぱられたままなのが気になるらしく、こんどは矢野よりも熱心に女の像に顔を近づけた。その女性画家

塗料の剥落した灰白色のずんぐりした姿はすでになかった。スケッチブックに描きつづけた遠い日の面影だけが、淡い木版画風の輪郭を残して験の薄皮に刷り込まれていた。橋梁の見えるこの界限にやってくるたびに、胸のあたりが妙にざわついた。いつのまにか嫌な癖になってしまっている溜め息をつき、矢野は大橋の中ほどの手摺りにもたれ、灰色の川面をしばらく見下ろしていた。川風の向きが変わるたびに、堰から溢れる流水の轟きが不意に音量を上げて耳もとをかすめていく。

画廊『S』のあまりめだたない看板が、河岸通りに面したひよろ長いビルの二階の壁面に取りつけてあった。その建物の前で矢野は心になんとなくひっかかるものを覚え、はてなんであつたらうと思案顔で立ち止まり、くすんだ看板をしばらくぼんやりと見上げていた。すると二年ばかり前に幼友達の森田に案内されて、この画廊を訪れたときの記憶がふと蘇ってきた……。

氷片を透過する光のような照明の輪の中に浮かぶ、壁面の女の像を見つめたまま、矢野はしばらく立ち尽くしていた。

——ほう、さつきから、えらく熱心に見とるねえ……ああ、なるほどこれか。いかにも矢野の好きそうな絵や。ちよつとわしらには暗い感じやけどな。

についての面識などなかったのだが、森田たちのやつている小さな読書グループ『犀の会』のメンバーらしいことは彼から聞いて知っていた。

そのとき矢野は何ものかの強い力によって、全身の感覚の中核が女の自画像に向かつてふたたび吸い寄せられているのを意識した。ああ、やっぱりあそこからだ……。それはかなり明晰な感情をともなう一種の気流であり、絵画の内部からこちらに向かつてたしかに放射されていた。目眩感を打ち払うように矢野は軽く頭をふると、森田を促しながらわざとゆっくりとした足どりで、その画廊の受付口をすりぬけビルの階段を下りていった。出てきたばかりの画廊の仄暗い空間の方にお気をとられていた矢野の目の底に、朱色の小粒の塊が焼きついていて、青い影のさした自画像の女の、襟元からのぞく肌色にその朱が染みだしている。残像が光と輪郭を失っていく速度を恐れるように、矢野はビルの出口で立ち止まり目を閉じていた……。

醒め切らない物思いをなけば引きずりながら、矢野はその画廊の前を通り過ぎ、いつしか香林坊の裏道を歩きだしていた。そのあたりから大通りよりもかなり低い地形が広がっている。湿った空気が静けさの中に澱んでいて、それはちよつと死者が漂わせているものに近かった。夜の化粧を落とさぬままに眠りこけている女たちの姿を思わせる

飲食店街、屈曲した路地のあちこちに庇を重く垂れたまま、依怙地に沈黙している古ぼけた格子戸の民家の軒先といったものが、商家と混在しながら舞っている。河岸に平行してそれらの狭小な街路に沿った家並みも、筆先から滴る薄墨書きの線条となって幾筋も走っていた。

不規則に蛇行して流れる用水路脇の小路をゆっくり辿りながら、いつのまにか長町方向をめざしている自分に気づいて、矢野はふと歩を緩めていた。やはりあの場所に向かつて歩きはじめていた。まるで自分が同じ行動を繰り返すネジ巻き人形みたいだに思えてきて、彼はいくらか自嘲気味に足もとの小石を蹴った。それは水路の急流に音もなく吸い込まれた。けれども、水路の暗い水底に潜むという精霊たちの、静かでも、抗いがたい力は、矢野を誘って容易に離さなかった。屈曲度の強くなっている用水路の石垣に打ち当たる水流のせいで、水音が高くなっている地点に来たときであった。上流で誰かが落としたものらしい赤いゴム風船が一個、早い流れに翻弄され水面を踊り跳ねるように滑走していくのが見えた。しつこい不眠症に悩まされていた頃、周期的にその兆候が現れはじめるとなかならず見る夢があった。黄褐色の奔流が、犀川の河岸ぎりぎりまでせり上がっていた。群集が河岸沿いに何か大声で喚きながら駆けていく。彼の名をくり返し叫びつづけて助けを求める女の子の声が聞こえていた。先ほどまで自

分の手をしっかりと握っていた柔らかい手の感触と温みが、鋭く脳神経を引っ掻きまわした。黒い流木に見えかくれして、激しく川波に採まれている赤い一つの風船……。

その犀川沿いに建っている神社の、閉じられた社殿の扉は風雨の侵蝕で塗料の剥落が目立っていた。狭い河岸通りに境内からせりだすように枝を広げている楠の古木が、道路を跨いで護岸の側にまで梢の先端をさし伸ばしている。そのほとんど変わっていない形と、暗く厚く重なった葉の繁みから仄かに匂う樹脂の香りが、遙かな日の楠の匂いを呼び覚ました……

或る年の夏の夜、楠の木陰に遮られた夜祭りの社殿の欄干に額を押しあて、彼はずっと一人の少女を待っていた。矢野の母が再婚先で病死して間もなく、浅野川沿いで遊郭を営んでいた義父の弟夫婦一家に少年の彼は引き取られた。夫婦には彼より四歳年下の娘がいて、その彼女の名が節子であった。せつちゃん、と愛称で呼ばれていた彼女を妹がわりに連れ歩いていた或る日、ふとした矢野の油断から犀川下流で彼女を溺れさせたことがあった。近くでゴリ漁をやっていた男たちに助けられたが、肺炎を患った彼女の予後は捗々しくなかった。里親と義父から叱責を受けた彼は、せつちゃんと遊ばないという条件つきで、郭の離れの物置のような一室が彼の新たな居場所になった。水難事故があって以来、せつちゃんと意識的に顔を合わせないようにし

ていたが、登下校の途中などで遠くから互いの視線が交わされる瞬間がむろんないわけではなかった。けれども、そこから先へ心が伸びていこうとするのを反射的に避けていた。家族の視線を恐れてというより、惹かれるものへの理由のない反発感が足首を縛っていた。鬱々と過ぎようとしている梅雨の終わりの頃に、せつちゃんが夏祭りの夜に犀川神社のお巫女さんとして踊ることになったという、郭の娼妓たちの噂を耳にした。犀川神社にお巫女さんの欠員が生じたのを、仕事の関係で縁のあった宮大工の義父が聞きつけて、弟夫婦に持ちこんだ話らしい。

社殿の奥の大鏡の鏡面が暗闇になかば溶けだして、光る楕円形を浮かび上がらせている。この地上に行き場をなくした彷徨える魂魄というようなものの形があるとすれば、たぶんこんな風であるのだろうか。すぐ近くで神官が太鼓を打ち叩き笛を吹いていた。巫女が舞う空間は、四方の大蠟燭の明かりのせいで、スポットが当てられたようにほぼ円形に浮かび上がっていた。すっかり大人びた物腰になっているせつちゃんが、その中央つま先立って伸び上がっていた。右手の金の鈴のついた柄をしゃらん、しゃらん、と巧みに捻って鳴らし、ゆっくりと左右に白衣の袂と赤い袴の裾をはらうように舞わせている。不意に激しい摺り足で黒光りする床板を滑るように小走り、白足袋の幾重にも重なりあう弧を描いていく幼顔の白塗りの巫女。彼女は

ふたたび中央に戻り、赤い袴の裾を優雅なしぐさで少し蹴り出すようにして足腰でバランスをとりながら、こんどは思い切りぐいぐいと伸び上がり背筋を大きく反らせると、その仰角にのけぞった女に成りかけの白々とぬめる喉首が、いきなり彼の目に烈しいフラッシュを浴びせる。せつちゃんは両手で金の鈴房の柄を掴み持つようにして高々と差し上げ、白衣の肩先を物狂わしく震わせてその鈴房の柄を連続的に力強く捻った。仄暗い中空に差し伸べられた巫女の袖口からあらわになった腕のしなりが、烈しく絡み合い交尾する二匹の白蛇の鎌首に見えてくる。大蠟燭の明かりに照り映えた金の鈴房が、エビローグの大捻りを数回繰り返すと、しゃらん、しゃらん、しゃらん……とひときわ高く鳴った。

その夜、遅くなってから気づかれぬように自室に戻った彼は、寝入りばなに夢を見た。しなり絡み合うふたつの白い腕の先端で鳴り震える鈴房の、眩むような光が額から背筋に沿って下半身を貫いたかと思えた。幽かな痛覚の入り混じった甘美で奇怪な感覚に怯えて弾かれたように起き上がると、濡れた下半身の感触をたしかめるために慌てて掛け布団をはぐった。シートに半透明の歪んだ楕円形の粘った染みができている。異様で未知なこの体験の衝撃に惑乱しながら、噴き零したものの返り滴に光り、まだ疎らで柔らかな性毛の茂みに起立するそれを、彼は凝然といつまで

も見つめた。夜半に近い街頭で客を呼ぶ娼妓たちのさざめきが、離れの居室の窓ごしに聞こえていた……。

神社からの帰途、河岸通り沿いの小さな喫茶店に入った。そこは和菓子などを作っている店なので、喫茶コーナーは狭く相客は居なかった。通りの護岸側に風情のよい一本の柳の古木が孤独そうに立っていた。

珈琲を注文し終えて店内のいくらか空虚な静けさに身を沈めていた。写真入りの旅館広告を刷り込んだカレンダーが、店内の壁面に吊るされているのが目に入った。何げなく視線をその上に這わせていた矢野は、その写真と宣伝文句に目が吸い取られ、瞬きを止めた。河岸通りを歩いているときに感じた、たえず何か忘れ物でもしているような心持が離れなかったそのわけが、古い木造旅館の輪郭をカレンダーの写真に見いだした刹那に納得できた。過ぎた歳月の傷みを封じこめた一葉の写真、書物に挟み忘れたままにしていた或る日、偶然にそれを書架で発見したときの、あの軽い空白感と驚きの混ざった情緒。それらが不意に記憶の底から重い浸出液となって、欠落した意識の隙間に押し上がってきたのだ。

節子と暮らしはじめた頃、一度だけこの河岸通りを歩いたことがある。長引いた労働争議の果てに失業し、食いつなぎに行商めいたことをやっていた。彼女は絶縁状態になっている実家などにむろん立ち寄りとはしなかった。知

女の後ろ姿が、職場で仕事の手を休めたときなど、矢野の脳裏にふっと浮かんだりする頻度がしだいに多くなりだしていた。

日曜日だったせい居酒屋はまばらな常連客だけなので静かであった。矢野は入り口に近いカウンターに席を取り、所在ないままに彼女から手渡されていた反戦ビラや政治パンフの類いに視線を落とした。今朝方、珍しく早起きをした彼女は、黒ヘルメットを押し込んだリュックを背負い、着古したジーンズにジャンパーといういつものスタイルで、未明の路上を一度も振り返らずに三里塚闘争の現地めぐしで急ぎ足で去っていった。その節子のいかにも颯爽とした後ろ姿を、矢野は立ち尽くしたまま眩しそうにいつまでも見送っていた。

「待った？ これでも大急ぎで来たのよ」居酒屋の扉を勢いよく押し開けて入ってきた節子は、大仰に吐息をつきながら言った。

「おれも来たばかりなんだ……それより、無事に戻れてよかったな」

「月並みな言い方するのね、それとも皮肉のつもり？ 大怪我するか、パクられてもすればよかったかしら」彼女はえくぼの濃い笑顔を浮かべて、わざとのように矢野の顔を

り合いに会うことさえ恐れて行き交う者にもひどく気がつかって道を歩いた。それでも二人には久しぶりの帰郷であったので、来し方の心の強ばりがいくらかほぐれていくような気がした。河岸通りにやっと安い一軒の旅館を見つけ、その二階の窓を開け放つと、眼下に犀川の流れを見渡すことができた。狭い窓枠のせいで、互いの肩が窮屈そうに重なり合うのも快く感じられ、半身をのりださせて流れる音と風を感じている一刻が、まるで小さな旅の途上にいる見知らぬ若い男女の絵姿のようにも意識されたりした……。

*

その日も国分寺駅前の居酒屋で、矢野は節子を待っていた。彼女との同居生活のきっかけになった場所であったが、二人はその後日を決めてそこへ出かけていた。職場が遠距離だったせいもあり彼の出勤時間は早かった。節子は集会やデモなどといった活動家連中とのつき合いを、いせんとして生活の要にしていたので帰宅も遅く朝の寝起きも悪かった。矢野はそのことを気にしていないというわけではなかったが、自分たちのこのちぐはぐな生活のリズム感が醸し出す奇妙な明るさと放恣さを、はじめはとても新鮮なものに思っていた。けれども帰宅してから夜半まで、居間の片隅にイーゼルを立てカンバスに向かいつつける彼

覗きこみ、足もとにリュックを無造作に置くと彼の隣に座った。そしてタバコに火をつけ深々と吸いこんだ。

「どうだった……現地の様子は」

「みんな、なんとかがんばっているわ。……でも、セクト間の内ゲバが激しくなりだしてるの。それがいちばん辛い、機動隊よりも恐ろしい」

「そうなのか、やはり」

「だんだん暗くなっていく。足もとからなにもかもがガラガラといきそう……心の火が、そのうちふっとかき消えてしまう気がするの」そう言って節子は、マスターが置いていった大ジョッキのビールの泡を、硬い表情のままで頬杖をつき、唇をまるめると勢いよく吹き飛ばした。

そしてカウンターの木肌に散る泡屑が液状に変容するのを、放心したように凝視しつづけている。ヘルメットに押され、いびつに変形した毛髪のあわいから彼女のかたちのよい耳朶がのぞいていた。見慣れた濃い朱色の七宝のピアスが、室内の明かりを反射して光っている。二人を襲った不意の沈黙に抗うようにして、矢野もまたその光る血の塊に似た小粒のピアスを、見つめつづける以外に方途がなくなっていた。

ちょうど相席の客が入ってきたのを潮時に、矢野は久しぶりに街頭の賑わいの中をぶらついて見ないかと節子を誘った。駅前であげ取ったビラに、商店会主催の恒例の祭り

の案内が載っていたのだ。路上の夜店も出るという。

「夜店ね、いいなあ……もちろん異議なしよ。でもその前にちよつと準備しなきゃ」と言つて彼女は頷きながら先ほどの濃いえくぼを取りもどすと、すぐに闊達なしぐさで立ち上がり足もとのリュックに手を伸ばし、その中をごそごそやりだした。

リュックからは黒ヘルメットや汚れた軍手、タオルといった類いのものがぞいでいたが、目的はそれではないらしかつた。取り出されたのは見覚えのあるジャケットであつた。それは、かつて神田駅前界隈の洋品店で間に合わせに彼女に買ひ与えたあの一着だつた。あれ以来ほとんどそのジャケット姿の彼女を見かけたことがなかつた。そのことがあらためて不思議に思えてくる。

「大切にしまつておいたのよ、ずっと」訝しげな矢野の表情を察知してか彼女は言つた。

「今日あたり、これを着てみようかなつて気がしてたの。予感的中ね、持ってきてよかつた。久しぶりの街歩きにジャンパーとリュックじゃ、やばくさいもの」

そのジャケットを小わきに抱え、彼女は小走りにトイレに向かつた。着替え終えて戻つた彼女の櫛を入れた髪は、柔らかい弾力をとり戻して膨らんでいた。薄いルーージュがそのジャケット姿にじつによく似合つている。神田駅のトイレから出てきたときの印象がその表情に重なり、矢野の

頬はひとりでに緩んだ。節子はリュックを背負い直すと彼の前に立ち、歩幅のある歩みで暮れなすむ街頭の賑わいの方へ向かつた。

夜店の人込みにも飽き、少し疲れて裏通りを歩いていたときであつた。

「珍しいわね、こんなところに」と言つて立ち止まつた彼女が、民家に小さな看板を出しただけの目立たない一軒の店を指さし、矢野の視線をそちらに誘つた。

その店には彫金と七宝焼の手作りのアクセサリーが並べられていた。間接照明のおだやかな仄明かりに包まれたそれらのひとつひとつが、独自の美の陰影をひっそりと競いあつている。壁面には目立たないかたちでいくつかの静物画が掛けられていた。

「この色、とても気に入つたわ」

顔を近づけ熱心にアクセサリーを吟味していた彼女は、そのうちのひとつをつまみ上げ、ほらつというような手つきで矢野の前に差し出した。それは彼女のピアスよりひとまわり大きい七宝のイヤリングで、明るく鮮やかな朱色に輝いていた。

「お似合いてすよ、きつと。わたしもその色がとても好きなんです」

それまで奥の古い籐椅子に静かに腰掛けていた和服姿の女主人が、気づかぬ間に笑みを浮かべて節子のそばに立つ

ていた。豊かであつたときの名ごりをとどめていた灰白色の長髪を無造作にヘアピンでまとめている。そのヘアピンの飾りにもやはり朱色の七宝焼きの小粒の珠が光つていた。彼女は近くにあつた姿見の前に節子を誘ひ、慣れた手つきで節子のピアスを外してイヤリングをつけた。鏡面に映る二人の女の、微笑みながら寄り添う立ち姿を、矢野は少し離れた場所で眺めていた。彼女らを飾る二つの七宝珠の朱の強い魅惑の磁力が、彼をその鏡面の内側へしきりに誘ひこもつとしていた……つかの間おそつたそんな幻惑が、私たちの部屋に入り込んだまま出られなくなった孤独な少年の甘美な悪夢、久しく忘れさつていた意識下のフィルムを不意に儼に蘇らせる。彼はしばらくそのせつない揺らぎ感に身をまかせてじつとしていた。買うことに決めたイヤリングの支払いをすませていると、背後から節子の弾んだ声が聞こえた。

「誰が描いたものなのかしら、この絵」

先ほどまでそれほど気にしていなかつた絵だつたが、彼は節子に促されてその壁面の絵に目を凝らした。現代絵画の領域から取り残された古風な写実を基調とした作風なのだが、力強い線と色彩のリズム感には素人ばなれしたものがあつた。その絵画に見入つていた節子が、女主人のほうに問いかけの視線を投げると、すばやくレジを離れた彼女はにっこり笑つて頷き返し節子のほうへ歩み寄り、その絵

は自分が長年描きつづけてきたものの一部なのだと、いくらかはにかみがちに話した。そして偶然にも節子と同じ美大の出身であることがわかつた瞬間から、彼女たちの会話は急速に親密さの度合いを深めだした。女たちに特有の軽やかに転がっていくお喋りのピリオドはなかなかやつきそうになかつた。矢野はしかたなさそうに壁面の絵のいくつかを繰り返し見づづけていたが、そのうち絵の印象のほうもしだいに希薄になりだした。

帰途の路上にはまだ夜店が並んでいた。狭い商店街の人込みを歩いている間も、彼女はイヤリングが気になるらしく、ときどきショーウィンドーに映る自分のシルエットに目をやっていた。

「なんだか、あたしには華やかすぎる気がしない？」

「そんなことないよ、すごく似合つてる。きみの雰囲気」

「でも、ヘルメットを被るときは、外さなきゃね」

「……」

「やっぱり、これを付けるのは今夜かぎりにおこうかな……」そう言いかけて彼女は、矢野の沈黙を解きほぐそうとでもするように言い足した。「とても楽しいひとときだつたわ。きつと忘れられない日になりそうな気がする。だから大切にしまっておきたいの、このイヤリング」

夜店を見終えて中央線で立川駅に向かつていた。二人は

吊り革を掴んで快い電車の揺れに身を任せていた。夜の車窓の硝子面には、節子と矢野の輪郭のぼやけたシルエツトだけが映っている。しかし節子の眼差しはそこではなく、もっと遙かな茫漠としたものを追うように、いくらか不安げに見ひらかれていた。

「あのひとのように、働きながらひっそりと、誰かのためにでなく絵を描いて生きていく……いいなあ、ああいうのって」節子はぼつんとそう呟いたきり、車窓の向こう側に拡がる闇の流れを見つめつづけていた。

節子を抱いたのはその夜がはじめてというわけではなかったのに、矢野にはなぜかはじめてなのだと思えてならなかった。彼女の肌に熱い未知なおのきが間歇的に疾走し、さるのを彼は感じた。逃れ去る火の鳥を捕まえようと、彼は不器用なしくさでそのたびに節子をひしと抱きしめていた。深く寝入っている節子の耳朶には、今夜かぎりなのだという、あのイヤリングが大粒の血滴のように鈍く光ってみえた。夜半に目覚めた矢野は、彼女のそれをなおしばらく凝視しつづけていた。ふとそのとき、矢野は彼女のそれに見入るおのれの眼差しに、なにかしら卑しく薄汚れた醜薄なものを意識してたじろいだ。彼自身にさえもしかとは定め難い、つかの間に移ろう情感の陰影であったが……。

美大を中退してからの彼女は、かつての活動家仲間との縁のほうも切れたらしく、デモなどに行くこともなくなっ

ていた。街頭に吹き荒れた五月の嵐は去り、路上の反抗者たちの群れもしだいに見えなくなっていた。都会のペーブメントには、デモ隊の投石用に使われて半欠けになった石畳や、催涙弾の濃いガスを浴びつづけたであろう石畳などが、まだ剥がされないまま斑状に残っていた……

トイレ入り口の板壁に立て掛けられたままになっているその油彩画の構図には、人目を惹く不思議な力が作用していた。不吉なほど黒く太く縁取られた一匹の狼が、エチレンガスの炎に似た光を湛えている藍青の夜空の、鮮やかすぎる黄色の満月に向かって喉首を不自然なほど反らせ、鋭く伸び上がり遠吠えをしている。ちよつと見にはごくありふれた絵本などにもありそうな、いたって単純な構図なのであったが、なにかしら色彩のマッスに潜められた狂気の気配が漂っていた。

ある夜、ドアを開けた拍子に、油彩から発散する真新しい揮発性の匂いがした。その日は労働組合の総会などがあり、かなり遅い帰宅になったので節子はもう寝ているのだろうと思っていた。それなのに障子ごしの部屋の明かりは煌々としたままなので、あるいは起きて本でも読んでいるのかもしれないと思ったりしたが、それにしても妙に静かすぎた。長丁場の会議の疲れと帰り道に軽くひっかけた酒のせいもあって、戸締まりもそこそこ上がりかまじにしばらく腰をおろして目を閉じていた。いかなるこたわりがあっ

てのことなのか、とても不可解なことではあったが、その油彩画は節子の言うとおりに玄関脇のトイレの壁板に、すでに三年近くも立て掛けたままにしていた。たぶん今日あたるの段階でついに仕上りの目処がたつたのであろうと、内心ほっと溜め息をつきたいような気分で、満月と狼の童画のようなその構図にぼんやりと目を凝らした。ああ、今年もやっぱり駄目だったわ、と公募展が迫るごとに聞かされつづけた彼女の、あの悲痛な語り言をもう聞かなくてすむのであった。同居生活という気楽さがすっかり気に入らしく、一緒に暮らし始めてまもなく取りかかったのがこの絵なのだ。

障子の向こう側からは、あいかわらず節子が立ってくる気配もなく、しかたなく立ち上がろうとしたときだ。よく耳をすまされば聞き取れないほどの、底深く押し殺した唸り声とも唸り上げる声ともつかぬ音声を耳にした。背筋を突き抜ける冷たい力に弾かれていきなり部屋に走りこんでみると、縁側のガラス戸に額が着くほどの位置で節子が座っていた。正座の挨拶姿のポーズで頭と首筋をぐいと上方に伸ばし、低く唸りながら開かれたカーテンの隙間から夜空を凝然と見上げている。その夜は空気が澄んでいたのか、珍しく月の明るい夜であった。帰宅した自分への悪戯めいた座興にしてはちよつと手がこみすぎているな、と思っていたのだが、不意にガラス質の透明な壁に囲まれてしまっ

ている彼女の姿態に、影のようなとらえどころのなさをひしと感じた。胸底から湧き上がってくる不安の煙の塊を追いかけて、彼女の手つきで、彼女の肩に触れて軽く揺さぶってみたが、凝固した節子の身体は微動もなかった。ほとんど瞬きのない瞼の陰に、何かにとり憑かれて見ひらかれた白目のめだつ堅い眼球が、けものめいてせりだし気味になっている。いっしんに見上げている彼女の視線の先には、やや歪んだ青白い満月がエチレンガスの炎に似た光輪に包まれて、地上の闇にうずくまる暗い物象の群れにうすい光の小雨を降らせていた。

矢野の姿にまったく気づかないで、低く唸りつづけている節子の、不吉な病を予感させる喪神状態はかなり深そうであった。

「どうした、節子」と、彼は上ずり気味に言った。

唸り声かふたたび高まりそうになったとき、思いきって力をこめ、節子の頬を数回立てつづけて平手で激しく打っていた。ようやく正気に戻った彼女は、乾いた焦点の定まらない目で、しばらく彼のほうを見上げていたが、突然、畳に身体を投げ出し大声をあげて泣きだした。今年もやっぱり駄目だった、出来なかった、と彼女は涙声の濁音で切れぎれに言うのであった。駄目なもんか、あんなに見事に出来上がっているじゃないか、となるべく下手な慰め言葉になるのを避け、さりげなく言ったつもりなのだが、それ

がたちまち過敏になっている自意識を刺激したらしく、彼女の背中をさするようになっていた矢野の手を邪慳に払い落とし、あなたなんかにあたしの苦しみがわかってたまるもんですか、あれでは駄目なんです！ もうあたしには何もありません、みんなおしまい。ああ光が見えない、とかな高く叫んでまた泣きつづけた。

手のつけようもなくなった彼は、泣くままにしておけばそのうちに気が落ち着くだろうと思いい、ジーパン姿で畳に伏している節子から離れ、部屋の片隅で遅い晩飯をつくって食べていた。すると、疲れたのであろうか静かになった節子のほうから、軽い寝息が聞こえた。困惑の果てにこみあげる物悲しさともユーモラスな気分が頬の筋肉を緩め、彼女の寝姿を見つめながら思わず彼は箸を止め苦く笑った。

ジーパンをパジャマに着替えるつもりで、昏睡に近い眠りでぐたりとなった節子の身体を抱き隣室に運んだ。指がジッパーに触れたとたん、弾かれたように半身を起こした彼女の右手がしなった。したたかに矢野の頬を打ちすえ胸板を突き飛ばした。先ほどの満月を凝視していたあの目が、眼前に光っていた。そのつもりはなかったのに、敵意にみちた彼女の抗いがかえって矢野の心を依怙地にさせていた。理不尽な衝動を抑えきれぬままにこんどは本気で節子の身体を求めだしていた。頑なに拒む女の閉ざされた愛の溝を、

が開いて、節子が不自然なほど緊張した姿勢で卒然とそこに立っていた。彼女は血の気のすべてを抜き取られた蒼白の顔面に、感情の昂進が急迫している徴候でもあるあの見ひらかれて迫り出した目で、彼を見下ろした。

「いま何をしたの。何を殺したのよ、あなたは！」と彼女はおそろしく早口で叫ぶように言い、矢野の手もとを指さした。

その潰された不運なカマキリの死骸は小ぶりの雌だったらしく、ちょうど箸箱の真下に隠されたかたちになった。彼女の視野には入っていないはずなのに、と彼は一瞬不審に思いながら沈黙した。

「なぜ黙ってしまうの。ごまかしたって駄目なのよ、いまさら。あたしにはみんなもうわかっていることなんですから、あなたのやり方が。……たった今、打ち殺されたばかりのちっちゃないきものの靈魂が、眠ってるあたしの目の中に飛び込んできたわ。そして泣き叫んで、呻き苦しんで、救ってくれて。……狂った蛍火みたいにぐるぐる目の中で回転して、痛い、痛いって、あなたの惨たらしい仕打ちを訴えてたわ。……さあ早く出さないよ、隠してないで！」

むろん隠すつもりなどなかったし、今の彼女に下手な積み明はかえって激高に拍車をかけるだけのようない気がして、彼は無言でのろのろと箸箱を持ち上げた。黄緑色の内臓をはみ出させたその雌のカマキリは、鎌状に折り曲げた前肢

むりにでもこじ開けようとしてジッパーを引き下ろした。あなただって人でなしよ、エゴイストよ。愛してもいなくせに！ どうせ、せつちゃんの哀れな身代わりなんですから、あたしなんて、と嗚咽まじりに叫ぶ彼女の抗いはほとんど狂乱に近くて、その日を境に節子はぶ厚い鎧の内側に入り込んでしまった。居間で寝ることを余儀なくされた彼は、眠れぬままに冷えたガラス戸に額を押しつけて、やや移動した中天の満月を節子と同じ眼差しでしばらく見上げ、立ち尽くしていた。

やはり遅く帰宅した夜、冷蔵庫の残り物を温めなおし居間の片隅で簡単な晩食をとっていた。節子が台所に立たなくなつてからはいつもそうしていたのだ。隣室でもう寝ているようなので、神経質な彼女の耳障りにならないように気をつかいながら箸を使っていると、首筋になにやら動くものが触れた。反射的に払い落としたそのものは一匹のカマキリであった。家のそばに草地があったので、ときどき昆虫が窓の隙間から入ってきたのだ。そいつは、ひよいと巧みに着地すると前肢を鎌状に折り曲げ、小さな三角形の頭部にアンバランスなほど大きめの、灰色の眼球で矢野を睨み上げた。その目つきがへんに彼を苛立たしくさせ、いきなり手にした箸箱で物音の立たないように押し潰してしまつた。

音の響きはさしてなかったはずなのに不意に隣室の障子

を持ち上げ、横倒しになった姿勢で完全にべちゃんこになっていた。虫の骸を前かがみで黙視しはじめた節子は、突然ひいっとアルミ板を釘先で引つ掻いたような声をあげ、両腕を胸もとで組み合わせて身をすくめると、満月を凝視していたあの形相に戻って矢野の方を見すえた。

「よく平気でやれるわね、こんなむごいこと。カマキリは仏さまのお使いなんだってこと、あなた知らないの。あたし、小さいころから母にいつもそう言い聞かされてきたわ。それを打ち殺すなんて、なんて残酷な男なの、あなたって！」

満タンになっていたダムの水路がいちどきに開いたように、または彼女が矢野の無知、非道をあらゆる語彙を総動員して責め立てたが、その勢いはことのほかエネルギーに満ちたものであった。生き生きと闘っていた頃の節子の輝きが、なんだかその瞬間だけ舞い戻ってきたようにも思えたのだ。北陸の夏空に突然訪れる激しい通り雨をやり過ぎす一刻のように、彼女から噴出してくるものに耐えながら、矢野はなにやら愉楽にも似た微かな爽やかさをさえ覚えていた。ひとしきり言葉の鞭でたたかいた彼を打ちすえると、いくらか気が鎮まつたらしい彼女は、隣室で眠りに就いたようであった。食事の片付けとカマキリの骸の後始末をしていると、ふだんよりも大きめの寝息が聞こえてきた。

節子はあの満月の夜のことであって以来、ずっとジーパンスタイルのまま寝起きして着替えることがなくなっていた。その衣服から発散する臭いが日増しに強くなっている、ときには異臭を覚えることもあり、いくどか注意したのだが頑なに拒むばかりであった。

室内には衣服からのものであろう濃い臭気が濃んでいた。布団からはみ出ている手の位置をなおそうと彼女の手首を掴んだが、死体のようにぐたりとしていてかなり深く寝入っていた。彼は今のうちに取り替えようと思いつき、ゆっくりと時間をかけて着衣を取り替え始めた。もう少しでそのジーパンが脱げようとしたときだった。気づいた彼女が鋭い怯え声をあげて跳ね起き、彼を突き飛ばすとジーパンが脱げ落ちたのもかまわずに、立ち上がると毛布を腰に巻きつけたまま部屋を飛び出て玄関口まで走り出た。ドアの鏡をいじっている彼女を、追いつがって必死の思いで抱きとめた。深夜の街路を、そんな風体で喚声をあげ髪振り乱して駆けまわる節子、その後を大声で追うという光景だけは、なんとか辛うじて免れることができた。その夜から彼女は部屋で寝ることさえ拒みはじめ、押し入れて眠ると言いだして譲らなかつた。根負けした彼は、押し入れの中に節子の薄暗い居場所を大急ぎでこしらえねばならなくなつた。押し入れに閉じこもつた節子は、へんな抑揚をつけてじくじくと啜り泣いた。障子ごしのその低い声音が居間に戻つ

若い女店員がテーブルに近づいて来たので、彼はそうたずねた。

「あんなに大きくなかつたと思えますけど……」と彼女はカレンダーをちらっと見上げて言う。「わたしらの子供の頃に、この店の二、三軒向こうに建つたの覚えてますよ。でも年寄り夫婦が亡くなつてしまつてね、廃業したんやと聞いてます」

その旅館は素泊まりだったので、夕食を外で済ませようと矢野が節子を誘つて宿を出たとき、こちらの懐ぐあいを察したらしいその旅館の老夫婦が後を追つて来た。対岸の町筋にあるという安価な川魚料理店の方向を指さしながら教えてくれたのだ。そのことがつい先日のことのように思い出された。が、なぜか川魚料理店の名称と所在のほうだけはひどく曖昧なのであつた。テーブルから立ち去ろうとしている女店員を引き留めて、ぼやけている記憶をたどりながらいくらかしつこくたずねた。彼女は途方にくれたように、さあ、とくり返すばかりであつた。やがて店の他の者に聞いてみると戻つたとき顔を見せなかつた。

遅い昼食を川魚料理店で食べてみるのも悪くはないな、歩きながらそんな気分が彼のなかで徐々に膨らみだした。そしてそのように意識しだすといつその欲求がつのりだしていった。対岸の入り組んだ裏通りの、川魚料理店らしい面影を持つ店を片っ端から探したが、節子と食事をと

た彼の耳に、いつまでもまつわりついて離れなかつた。

矢野の居ない日中は部屋に出ているようで、食事の用意をして置くとなくなつていたのが、そのままになっている日が多くなつた頃から、不安は急速に深まりだした。彼女のほうが先に減ぶのか、自分が先に減ぶのかを競り合っているような、こんな生活をなんとかしなければならぬ、そうした思いの切実さが彫刻刀の刃先となつて無力感に萎えた胸もとを突いた。せつぱつまつたあげく、彼が以前に節子から聞いていた両親に連絡し事情を話すと、久しく音信のなかつた父親の、恨みがましい繰り返す母親の涙声や電話の彼方から長々と響いた。精神医の受診を終えた節子と両親を東京駅に見送つた日、目を伏せて何ひとつ言葉を発しなくなつた彼女の削げ落ちた背中の残像が、帰途の上で立ち疎む彼の網膜からなかなか消えていかなかつた。たつた一度だけ彼女の実家に電話をしたのだが、矢野であることがわかつたとなんにも通話を切られた。父親であろうその男の声にも憎しみのパルスが、受話器を握る手に伝つてきた。

*

「たしかこの近辺に、古い木造の旅館がありましたよね、あのカレンダーの写真のような」

ちょうどそのとき注文した和菓子と抹茶を盆に載せて、

もししたあの店はいっこうに視野に入つてこなかつた。道行く者にたずねてみても、在るには在つたが今はもうないのではないかとか、浅野川方面に在るのではないかといつたふうの、いたつて曖昧模糊とした内容のものであつた。歩きまわつた末に、徒労感を深めるばかりなのに気づいて、結局どこにもありそうな料理店に入つてしまった。

夕刻に画廊『S』の前で待ち合わせることにしていた森田の姿はまだ見えていない。しばらくすると、手にしていた文庫本をポケットにねじこみながら、のそつとビルの物陰から姿を現した。片手を挙げて振り、こちらに向かつてゆつくりと歩いてくる。

画廊のすぐ近くに彼の行きつけの喫茶店があるというので、そこに入つた。夕暮れの斜光が差しこむ窓ぎわの席からは、画廊『S』のひよろ長い老朽ビルが見えていた。久しぶりに会つた彼は、いくらか白髪がめだち顔面の皺も深くなつたが、表情には北風が抜けていつた後のような穏やかさが、内面から惨み出る微光のようにも感じられた。銀行員の森田は、帰郷のたびに数を減らしていく矢野の幼友達の一人で、今では会うのもほとんど彼に限られてしまつている。こんどの帰郷もさして意識はしていなかつたけれど、じつは彼に会うためだつたのではないかとさえ思えてくる。ひよつとしたらこのままこの土地に踏みとどまっていけるのかもしれない、ひっそりと木など削りながら……。

ふとそんな淡いしかし切実でなくもない、望みのようなものが湧いてきたりする。

「三島澄子展以来になるなあ、あれからどうしとるんや。

……あの彼女の絵、もういつペン見てみたいと思うことがある。でもまあむりやろうな」矢野は、窓の向こう側に視線を投げながら言った。

「ああ、三島さんの絵か……じつはな、彼女、先年亡くなられてね。なにせ急な病やったもんやさかい、しばらく誰も気づかなかったそうや」

「……」

「部屋のドア近くで倒れとつたらしい。マンションですつと独り暮らしやったさかいね。近くに住んどの両親が尋ねて来たときや、もう冷とうなつとつたちゅうわけや」

「妙なこと聞くようだけど、……三島澄子ってのは本名なのかねえ」と矢野は、少し前からむずむずと喉もとに絡まりはじめていた疑念を思いきって言った。

「さあ、わしらは読書会で知りあつとる関係だけで、プライベートなことはようわからんのやけど……ま、ふだんはどことなく独身という雰囲気、寡黙な女性やったけどねえ。ただビールを飲み出すと底なしでね、なんだか小難しいことを元気に喋りまくっていたな。東京の美大生だった頃、過激派学生の仲間だったことや、そのとき知り合った男と一緒に暮らしていたというふうないつもワンパターン

しとるねえ」と彼はのろい足取りでついてくる矢野を振り返って言う。

「いや、そんなわけじゃないんや」

「ほんなら安心や。今から直行するぞ、オーレリアに」

大通りから脇に下がる緩い坂道を抜けて裏通りに出ると、用水路沿いに息を潜めている家並みの連なりがあり、平行しながら人通りの少ない小路が片町方向に続いていた。赤い風船を水面に踊らせながら勢いよく流れていた水路の、あの光る刃先に似た波形は日没とともに闇のなかへ消え失せ、幽かに爪弾かれる弦のような流水の音だけが聴こえている。

森田と別れた後、矢野は疲れも出ていたのか真夜中近くに泥酔状態でホテルに戻った。付設の喫茶室の飾り窓を押し開いて、顔見知りのフロント係の女が困ったような硬い愛想笑いを浮かべて顔をのぞかせた。その表情が、不意に身勝手な酔っ払い心理を刺激した。彼はわざとのようにエレベータを利用しないで、はあはあと荒い息をつきながら階段を靴底で踏み鳴らして上った。フロントの女にも自分にも、むしろ意地の悪い感情がむらむらと湧いてきた。落ち着きはらった屋内の静寂にさえ憎しみのようなものを覚え、彼は何かわけのわからぬ言葉を喚いた。虚ろな深い穴底に、かけがえないものを不本意にも棄て去ってしまった後の、ひりつく空白感から逃れようとあがいていた。

の話を、冗談まじりに彼女からいくどか聞いた覚えがあるな……でもねえ、あの彼女のメランコリックな画風からは、ちよつとにわかには信じがたいがね」

「葬儀には、むろん参列したわけやろ？」矢野は、最後の駄目押しでもするような口調で言った。

「それがね、親族だけの密葬なんや。で、読書会のメンバーはだれも行つとらんわけや」森田は、喉が渴いたのかコップの水をいっきに飲み干し、「矢野。どうしたんや、いったい。えらくこだわるねえ？」と問い返した。

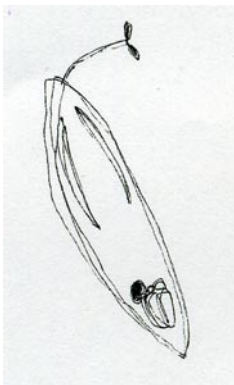
「いや、なんとなくね……」いくらかうろたえて言葉を濁し、矢野はぎこちなく席を立った。

「おかしな男やなあ、まったく。相変わらずやね」

森田も苦笑しながら席を立ち、二人は出口に向かった。ひそかに脳裏に描いていた幻の画像が、額縁ごと頭の中からすつぽり抜け落ちてしまったような気分を抱いて、矢野は香林坊の裏道を歩いた。片町の裏通りにオーブンしたばかりのオーレリアという洋風居酒屋があるので、そこでとにかく一服しようやと言いついて、森田はさっさと先へ歩きだした。が、矢野はなんとなく気乗りがしなかった。遅く食べた昼食のせいだけではなかった。胸につかえている物思いを、もつと直接的に吐き出せる内密な場所が欲しいと思っていた。

「どうかしたんか？ なんやらさつきから気分悪そうな顔が、もうそこへは手のとどきようがない。階段を転げ落ちていき、首の骨を折って身悶えている自分の姿を脳裏に弄び描いて、彼はホテルの階段をよるめきながら上っていった……」

目覚めぎわのしづい顔を細めて、レース織りの白いカーテンごしに洩れ落ちる鈍い光の方角を見上げると、どうやら秋雨でも来そうな気配であった。ベッドから下りてカーテンを開けてみると、やはり秋雨が降りだしている。ホテルの窓ガラスが室内の暖気で薄く曇っていた。長町方向に広がる古い家並みと混在する商店街の、モダンな装いの小規模ビル群を、立ちこめだした薄墨色の霧が覆っている。窓ぎわの小テーブルの白いクロスの上に、路上で拾ったキーホルダーの鈴がしんと光っていた。チェックアウトの時刻だったので、矢野は大急ぎで身支度をすませると、金の鈴をたしかめるようにぎゅつと握り締め、上着の内ポケットの底深くに押しこんだ。



全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

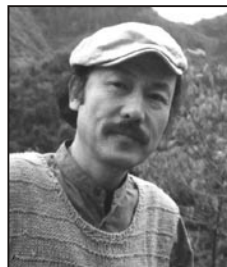
文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設しました。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから(3年以内とする)優秀作を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌賞優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。
 - ② 毎年**公開選考会**を行ない、候補作品について十分な討議を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。
 - ③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。
 - ④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員(選考会参加)、および文書選考委員(選考会不参加/文書のみ)によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。
 - ⑤ 各委員投票持点は特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は3点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は当面設けない。
 - ⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前までに行い、選考会当日までに開票集計して発表する。
 - ⑦ 最優秀賞は一人が原則だが、二人もありうる。
 - ⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。(賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる)
 - ⑨ 最優秀賞選考過程・結果は「文芸思潮」に発表する。
 - ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。*
- この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2007年5月25日 (2009年5月1日※⑩を加えて改訂)

全国同人雑誌振興会
文芸思潮



遠矢徹彦

とおや てつひこ

金沢市出身、高校在学中に地元の同人誌「北陸文学」入会を試みたが、主宰者の私の提出作品についての感想は『文章甚だ未熟につき今少し学業に傾注されたし』というものだった。過敏な自意識を傷つけられた文学少年は、いささかやけくそ気味も手伝って、学業を放擲し当時燃え盛っていた内灘闘争に参加、以来左翼運動に傾注、ついにパルタイから左翼小児病との烙印

を押されるに至った。そしてこの病はついでに結核という肉体の業病をも併発させた。この二つの病はともに私の内部の深層に今も潜伏しつづけている危険でしぶとい宿痾なのだ。金沢を追われるように去り、南九州のサナトリウムにて長期療養中、患者運動体の一員として60年安保闘争を体験。上京後も、再度の長期療養を経て60年代後期の反戦派諸運動に合流、若き活動家群像との交流を深める。1974年、文芸誌「アングレス」創刊、アナキスト詩人秋山清追悼号をもって休刊。1978年、文学伝習所の設立趣意書に共鳴し参加、機関誌にて創作活動を始める。1998年、「ボルバの行方」で新日本文学賞。2001年、短編小説集「波うちよせる家」(新日本文学会刊)で泉鏡花記念金沢市民文学賞。2004年短編小説集「べちゃんこにプレスされた男の肖像」(審美社)を出す。現在、「風の森」「北陸文学」等の多くの同人誌の仲間とともに、永久革命者ならぬ永久文学青年の初発の志を持続しつつ、なお生きかつ闘い、書き継いでいる。



☆「文芸思潮」は左記の書店で
店頭販売されております。

〔東京〕
ジュンク堂池袋本店
紀伊國屋書店新宿本店
書泉グランデ神保町本店
東京堂書店神保町本店

〔富山〕
紀伊國屋書店富山店
中田図書販売